

「青年海外協力隊」

本間

HOMMA Hiroto

裕人さん

“現地の人の視点”で
途上国に貢献したい

「記念すべき25周年の大会だから、早速“オマー”に任せるよ。よくアイデアを練ってね」

2011年3月、青年海外協力隊員としてブルキナファンに派遣された“オマー”こと、本間裕人さん。公用語のフランス語では“H”を発音しない。“ホンマ”がいつの間にか“オマー”になり、みんなからそう呼ばれている。

幼いころから、世界地図を見ながら家族で海外の話をよく聞いたという本間さん。その影響からか自然と「世界を旅してみたい」と思うようになり、20代前半にはアジアやオセアニアへ長期放浪の旅に出た。帰国後は、

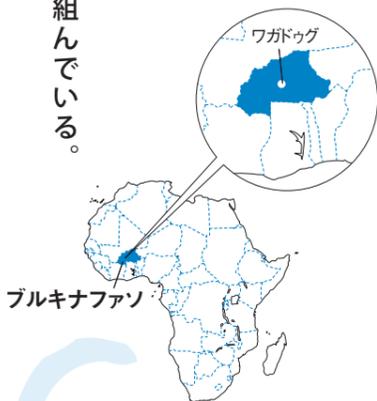
PROFILE

1979年東京都出身。2003年に大学卒業後、オセアニア、アジアを放浪。帰国後、ミュージックビデオ制作会社に就職し、その後フリーの映像ディレクターに。2011年3月から青年海外協力隊(視聴覚教育)としてブルキナファンで活動中。

JICA Volunteer Story

「クリエイティブな仕事に正解はない。
“伝える”“技術を磨いてほしい”」

“スポーツの意義”がまだあまり浸透していないアフリカ西部の国ブルキナファン。青年海外協力隊の本間裕人さんは、日本の映像業界での経験を生かし、スポーツ・余暇省の広報活動に取り組んでいる。



子ども向けバスケットボール教室で、スポーツ・余暇省の同僚がコーチにインタビュー。その様子を撮影した本間さんの映像は、国営放送のスポーツ番組で使われた

長年の夢だった映像業界に飛び込み、2年半ミュージックビデオ制作会社で働いた後にフリーの映像ディレクターに。テレビ番組から企業のPRビデオまで多彩なジャンルの作品を手がけ、撮影や映像編集の経験を培ってきた。

そして迎えた30代。「映像の仕事をしながらも、いざ海外で働きたいという気持ちはずっとありました」という本間さん。この先の新たなステップを考えた時に「その国に根を下ろし、現地の人の視点に立つて役に立つことをしたい」という意識が芽生えた。そこでたどり着いたのが、青年海外協力隊への挑戦だった。

本間さんの配属先は、柔道やサッカーなど各種スポーツの大会の開催を管轄しているスポーツ・余暇省の広報コミュニケーション局。日本での経験を生かし、報道資料や広報用のポスターやCMの制作を支援している。ブルキナファンでは健康増進のために運動するという意識が低いため、国民にスポーツの意義を普及することが重要なのだ。

赴任して最初に任されたのが、年1回の自転車レース「ツール・ド・ファン」25周年記念大会のポスターのデザイン。これまでは写真が使われてきたが、本間さんは変化をつけようと、デザインソフトを使ってイラストを作成することに。しかし驚くべきことに、局長から伝えられたのは「締め切りは今日の夕方」との言葉。「今となっては、この時間感覚がブルキナファンらしいなと思います」と笑う本間さん。そう、この国では事前に計画を立てず、「なんとかなる」と直前に動き出すことが多いのだ。

試行錯誤を経て約8時間で仕上げたポスターは、同僚たちにも大好評。別の部署の人からも「あのポスターを作ったオマーか」と声をかけてもらえるようになった。「最初に大きなチャンスをもたらえたおかげで、協力隊員として良いスタートを切ることができた」と本間さんは振り返る。



a. 海外遠征から帰国した自転車ナショナルチームの選手と握手するスポーツ・余暇省大臣を撮影
b. 赴任直後に作成した「ツール・ド・ファン」のポスター。人が正面を向いたイラストを大胆に使い、これまでになかったデザインと大好評だった
c. スポーツ大会の告知ポスターを作成するため、編集ソフトを使ったデザインを同僚に指導
d. スポーツ関連のイベントにはアーティストを呼ぶことも多い。音響機材を設置したり、動画や写真撮影をしたりと大忙しだ

“実践”の積み重ねで
映像技術の向上を目指す

ブルキナファンでの活動を、「4人しかいない制作会社に中途で採用された社員」と表現する本間さん。広報コミュニケーション局では、デザインや編集、動画・写真撮影まですべての作業を4人で行っている。毎日が大変忙しく、映像技術は必要最低限の基準をクリアしていれば“よし”とされていた。

例えば動画の編集技術。「パソコンソフトを使うのですが、彼らは必要な映像を切り落とし、時系列のまま映像をつなげることが編集だと思い込んでいた。でも、映像の順序を入れ替えたり、印象的なシーンにフォーカスするなどの作業こそが、本来の編集なのです」。それを学んでもらうには、実践を通じて伝えるしかない。その絶好の機会がスポーツ・余暇省の開催に合わせて流す「スポーツ振興CM」の制作だった。

「人の少ないシーンから多いシーンに徐々に切り替えて盛り上げてみよう」「同じアングルの映像が続かない方が、見る側にとってもおもしろいはず」「運動中の映像が足りないのでは追加撮影をしては」

インパクトのある映像になるよう、一つ一つアドバイスをしながら“演出”していった本間さん。そうしているうちに、次第に同僚が自分たちで考えて工夫を加えるようになった。「クリエイティブな仕事に正解はないので、“これが絶対”とさえないところが難しい。私のやり方を見て、“こんな考え方もあるんだ”“これを取り入れてみよう”と取捨選択しながら、技術レベルを高めてくれれば」と本間さんは語る。

活動期間は残り約10カ月。音楽が聞こえれば踊り出す陽気な同僚たちに、機材の使い方や編集・デザインの指導を続けながら、映像技術のマニュアル作りも始めた本間さん。いつの日か、彼ら自身で人々の心に残る作品を生み出してくれることを願っている。